

ハヤテのまほう！

とまとまそ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

綾崎ハヤテは親から約1億5千万の借金を押し付けられ公園で黄昏れていた！しかーし、良く分からない世界の収束力やら意志力やらその他微分積分してたり何やらで、公園のベンチで眠ってしまったハヤテは全く知らない場所へとワープ、しかもその場所はハヤテの過ごす2年前の世界らしい！見知らぬ土地で活動を始めたハヤテの運命は如何に!?(CV 若本規夫)

・まあ、つまり原作前の綾崎ハヤテを魔法少女リリカルなのはの世界に突っ込んだだけです。その他パロネタ、コラボネタアリアリで行かせて貰います

目次

住宅街でサバイバル?!?!? 編

1話 なんか世界って突拍子も無く無茶なことを突っ込んできま
すよねbyハヤテ

2話 えっ?!? 誘拐ですか…! いやいや僕がそんな事を考えたこと
なんて一度も…! byハヤテ

9

1

住宅街でサバイバル?!?!編

1話　なんか世界つて突拍子も無く無茶なことを突っ込んできますよねbyハヤテ

しんしんと閑静な住宅街に雪が降る、とても寒い日。本日はクリスマスイヴなので、世間ではホワイトクリスマスとして幸せな一日を各々が過ごしているのかもしれない。けど抱えてしまった事情のせいで、本来なら幸せな意味合いを持った日であつても僕にとつては厄日でしかない。

「はあ…」

数十分前に公園のベンチに座ってから何回しているか分からない溜息をつく、口から白い息が逃げ出ていく。それを僕は無感情に眺めて、再び俯く。

1億5千万円。それが今日一日で押し付けられた借金の金額だ。

きっかけ、というか発端はいつも通り僕の両親で、今日の夕方家に帰ってみればクリスマスプレゼントという幸福感のあるワードと共に借金の請求書が窓ガラスにゼロハンテープで貼られていた。その後数分しない内に借金の取り立て屋が襲来したため窓ガラスを突き破り2階の窓から飛び降り逃走、今に至る。

にしてもクズだクズだとは思っていたけれど、まさかこんな超絶高額な金額の借金を両親が抱えてたとは露とも知らなかった。どうせその金額の使い道は賭博なんだろうけど、ここまで借金を膨らませるとかこれはこれで一種の才能なんじゃないだらうか…?・?

…まあ消えた両親（クズ）のことはさておき。問題はこれからだ。借金の請求書は家（と言っても恐らく既に売りに出されてると思うから過去形）に置いてきてしまったんだけど、これはまあいいや。問題は返済方法だ。

働いて返す…と言っても幾ら何でもキリがない。普通に働いたら

借金返済だけで一生を終えるだろうし、何より金利を考えたらもしかすると払い終えられない可能性だってある。一番現実的な方法が一番非現実的な方法になってるのはどういうことなんだろうか。

次に宝くじや賭博で一攫千金……そこまで考えて、一瞬で頭の中でバツ印を付ける。

まず宝くじは僕の運じや絶対に当たらないし、当たっても僕の不運によつてそのお金は懐に入らず終わる、そんな気がする。

それに賭博をしようにも元手が無い。法外な賭博をやつてる裏カジノだとまず入場するのだけでも数万円、そして中のレートも凄まじく高いから多分無理だ。稼ぐ稼がない以前の問題になつちやうだろう。

そして最後に残された手段……犯罪。主には銀行強盗に身代金目的の誘拐だろうか。これなら手つ取り早く借金も返せるけど、だけどやることは犯罪だからリスクもかなり高いし道徳的な問題もある。僕としては一番選びたくない手段ではあるんだよあ……。

……これが窮地つてやつなのかな……打つ手が無いしもうどうすることもできない……。

その時、僕の脳内で天使が舞い降りてきた。

『えーっ！犯罪を選ばないなんて勿体無いよ！簡単に借金を返済できるんだよ？やろうよ犯罪！レッツ犯罪！』

……ねえ僕の天使、本当に君は天使なの？天使つてそんな黒く汚れた方法を僕みたいな小市民に薦めていいものなの？

そんな時、今度は悪魔の声が脳内で響き渡る。

『え……でも犯罪つてなんか怖いし……とつちゃんもやつちやいけな
いって……ダメだつて……』

いや、とつちゃんつてどういうことだ。しかも悪魔つていいながら良識的だなおい。

『大丈夫だよ！万全を期したらそう簡単にバレないから実質的にはローリスクハイリターンだよ！』

『いやでも……犯罪は犯罪だし……お巡りさんに捕まっちゃうよ……』

『君ならできるよハヤテ！ほら、あそこのベンチに見るからに身なり

の良さそうな服を着た女の子がいるでしょ、あの子を攫って身代金を要求すれば良いんだよ!」

『そんなのダメだよ…怒られちゃうし…やめようハヤテ』

何かこれ、悪魔と天使の位置逆じゃない?

『でも悪魔君悪魔君、良く考えてみてよ?』

『良く考える?』

『そうさ。身代金を要求する方法なんてそれこそ幾つもあるんだよ?受け取りと一緒に逃走用のへりを要求したりすれば、ハヤテならどこにでも逃げれるよ!』

『言われてみれば…ハヤテ、犯罪しよ?』

『絶対にダメです…どっちも消えて下さい!!』

結局は天使が犯罪肯定派に悪魔を変えることに成功したので、頭を振って犯罪肯定派の天使と悪魔を消し思考をリセットさせる。悪魔的には正しい発言に変わった気もするけど、やっぱり犯罪は良くないと思うし、何より道徳的にもアウトだよなあ。

…さて、本当にどうしようか。まさか天使の言うように、本当に向こうに座る金髪の女の子を誘拐するわけには行かないし、だからと言ってもう打つ手なんてありはしない。

「ううう…さぶっ」

思わずコートで全身を包み寒さから身を守る。もう日が完全に落ちてから日光の暖かさはないし、天高くから降り注ぐ雪が肌に当たって仄かに冷たいし、何かもう体が鉛みたいに動かないし眠いし寒いし…。アレ、これ、やばい奴なんじゃ…?でも僕だつて不肖ながらこの小説の主人公なんだし、1話からまさか死ぬなんて…。

「…あれ、おかしいな、意識が…視界がクルクルする…」

もうダメだ、つてかこれあれ、本当にものすごいやつなんじゃ…。

そう思い、限界を迎えた僕の意識は暗転した。

—————。。。。

「ううつ……」は……」

思い瞼を開くと、眩ゆいほどの光が差し込んできた。ううつ……ここは……確か……

「……そっか、僕、借金取りに追われたあとに公園で寝ちやっただ……」
キヨロキヨロと周りを見渡すと、公園の端の方に大きな時計があった。時間を見る限りどうやら既に昼のようだ。自分でも知らないうちに疲れていたのだろうか……まあ疲れる要因は両親のせいではなくさんあつたしなあ……

「……つてかあれ、ちよつとこれは冬にしては暖かい……いや暑い……！」
思わず上に着ていたコートを脱ぎ横に投げ捨て……おつとと、上着はこれしか無いんだった。危ない危ない、お金も無いのに貴重な衣服を雑に扱うところだった。そんなこととして破けたら後悔しかないし、何よりこれから本当にどうするか……

「……なんかやつぱり冬なのに暖かい、つてかこれ本当に12月の気温……？」

安物のシャツ1枚しか着てないのに、体感的に20度くらいはありそうだ。何かがおかしい、流星に12月の異常気象と言っても限界があるだろうに……

「……と言うかそもそも、良く見たらここさっきの公園じゃないような気がしてきた……」

僕の今座ってるベンチの向かい側にも一つ、寝る前に金髪少女が座ってたベンチがあるはずなのにそれが無い。つまりここは僕の知る先程の公園とは違うのかもしれない……

「……そっか、公園の名前……」

僕はそのことを思い出すと、公園の出口まで走る。確か先程まで僕のいた公園の名前は「負け犬公園」とかいう素晴らしく僕のコンプレックスを弄る名前だったはずだ、あんな殊更酷い名前を忘れるはずはない。

「…あつた!」

公園の名前は、——海鳴海浜公園!? 負け犬公園じゃない!?

「…ん?これは…」

足元まで風で吹かれてきた新聞を拾い上げる。そうか、これで今日が異常気象でこんな温かい気温なのかどうかの真偽が分かるんだ。

「日付日付くつと……?!?」

ええつと、待って待って。嘘でしょ、嘘ですよ、幾ら僕が不幸だとしてもこんなものってちよつとあんまりじゃ…。

「今日が2002年の5月…!? 確か昨日は2004年の12月24日だったはずだし…」

咄嗟に脳裏に思い浮かんだのはタイムリープ。でもそんな事が洋画に出てくるようなゴテゴテの機械とか無しで出来るのだろうか? というかそもそもそんな現実的に無理なんじゃ…。

「…いや、まだ方法は残ってる。そうだよ、最初から人に聞けば良かったんだ…!」

…最初からそうすれば良かったじゃん、何て野暮なツツコミはさておき。

かなりの時間固まってしまったけど、取り敢えず新聞を持ってさっきのベンチに戻る。すると少し前まで僕が座っていたベンチには先客が座っていた。

「あれは…女の子? でもさつき座ってた金髪少女より背は小さい…小学生かな?」

栗色の髪をした女の子はずつと顔を俯かせている。表情こそ読めないけど…雰囲気的に落ち込んでいるのだろうか。

「…あ、コート……あのベンチに置いたままだった…」

コートをベンチに置きっぱなしにして公園出口まで走ったんだっ…。

でもこうなると、あの女の子に話し掛けずにコートだけ取って立ち去るのは少し不自然になっちゃう気が…というかそもそも行く宛も無いんだけど…。けど話しかけるにしてもあんな重い空気相手に何を言えば良いのやら…

…考えても仕方ない。ここは一人の高校生として、人生の先輩として上手く臨機応変にこの場を切り抜けよう！

「や、やあ。こんにちわ」

「…こんにちわなの」

何をやってるんだ僕。早速切り出し方から不自然な感じになってるぞ。絵面だけ見たら、もしかしたら幼女趣味の高校生が話しかけるように見えるかもしれない。…どうにかせねば…！

「えつと…ところで何してるの？砂場とかで他の子と混ざって遊んだりしないの？」

少し離れたところに見える砂場では女の子と同年くらいの子どもたちがトンネルを作って遊んでいる。…もしかして仲間外れ、とか…？

「…なんか、やる気が起きないの」

どうやら僕が懸念した可能性は間違っていたようだ。

僕はその先の事を聞いていいのかどうか迷い、内心で葛藤している。と女の子の方から続きを話し掛けてきた。

「…実は、パパが入院してからママとお兄ちゃんとお姉ちゃん、家の仕事が大変になって全然遊んでくれなくなったの。でもなのはママ達に迷惑掛けたくないから、こうしてお外にいるの…」

…僕がこの話を聞いて、まず思ったのはこの女の子の大人っぽさだ。こんな幼いのに自分の我が儘に振り回されず、喫茶店を営む家族に配慮できるなんて正直凄いと思う。…僕？僕はそもそも環境自体が普通じゃなかったしなあ…。

でも幼い子を寂しがらせた挙句、こんな所で一人にするなんて、どれだけ忙しいと言ってもそれは間違ってると思う。多分ネグレクトではないのだろう、だけどこのまま放置も良くないのは明確だし…。…そっか、一人の時間を減らせば良いのか。

「ねえ、名前は？」

「…高町なのはなの」

「じゃあ高町ちゃん、これから一緒に遊ばない？」

「…へっ?」

幸いこの公園には遊び道具が沢山ある、これらを使えば問題ないだろう。

「じゃあブランコでもしようよ、楽しいよ」

「…うん、じゃあやるの!」

—————。

時間は過ぎ、夕暮れ。

既に時刻は四時を回っており、僕と高町ちゃん以外にこの公園で遊んでた子どもたちも親の手を引かれながら続々と園内から出ていき始める。

そして高町ちゃんも、そろそろ帰る時間になっていた。

「今日は楽しかったの!」

「そうなんだ、それは良かったよ」

僕が話しかける前までは高町ちゃんがこんな満面の笑顔を浮かべることがなかっただろう、そう思うと少し良いことをした気分になる。実際はただ遊んでただけだけど。

「そうだ、君、名前はなんて言うの?」

「えっと、綾崎ハヤテだよ」

「綾崎ハヤテ…ハヤテ君なの!」

「いや君付けて高町ちゃん…」

一応仮にも高校生相手に君って…僕ってそんな年上オーラとかないのかな…。

「…え?でもハヤテ君、見た目はなのと同じくらいなの」

「……………えっ」

「ほら、身長もこんななの」

そう言っつて僕の目の前に立ち、自分の頭のとっぺんから僕の頭のとっぺんまで右手を移動させる。その軌跡はとてもフラット、つまり平行だ。

「ね？・なのはと一緒！」

「そ、そうだね、あはははは…」

拜啓、どうやら僕はタイムリープ&ワープしただけでは収まらず、体が某高校生探偵のように縮んでしまったようです。これからどうしよう。

2話 えっ!? 誘拐ですか…! いやいや僕がそんな事を考えたことなんて一度も…! by ハヤテ

「さよならー! じゃあまた明日もここでなの!」

「そ、そうだね、サヨナラ、あはははは…」

さり気なく明日以降の約束(強制)をされて去っていく高町ちゃん。あ、そういえば今日の日付とかこの場所について聞くの忘れた…まあもう仕方ないかな。

さて、…これから本当にどうしよう。家は無いし(元の場所に戻っても無いけど…)、体は縮んだし、お金も無い。確か手持ちは12円くらいだ、うわ何も買えないじゃん…!

そうだ、まずは衣食住を整えることを考えよう。

まずは衣、…当分の服かな。それ以上は…特に出来そうにない。次に食、これはもしかしたら自然公園とかあればそこで釣りをしたり食べれる雑草を探したりして賄えるかもしれない。最後に住、…この辺りに廃家とか廃墟ビルとかあるかな…?

「…まあやってみなきゃ分からない! 綾崎ハヤテ、住宅街でサバイバル生活、行きます!」

意気揚揚、僕は取り敢えずこの意外と大きい公園の探索に乗り出すのだった。

――。

「びっしょびしょに濡れた…」

現在僕は、偶然見つけた廃墟ビルの三階部分で焚き火をしながら池

で取れた魚を焼いている。

「それにしてもまさかあんな住宅街の真ん中の公園で、10m以上の魚が居るとは…」

一応それなりにサバイバル能力を持つていると自負している僕は高町ちゃんと遊んだ後、そこら辺に落ちてる材料を使ってボロい釣り竿を作って池で魚釣りをしていたのだけど一匹釣った後に突然物凄く大きな魚に遭遇、作ったボロい釣り竿ごと僕は池の中に引きずり込まれたのだ。

流石に池の魚なので肉食じゃないのは幸いだったけどボロい釣り竿は壊れシャツとズボンはズブ濡れ、仕方なく就寝用の新聞と焚き火用の薪を拾い集めて魚をビニール袋に突っ込み、ここを見つかるまで二時間もの間歩いてきたのだ。

「にしても、結構良いなあ…本当に廃ビルなのかな？」

今勝手に間借りさせてもらってる廃ビル、実は中々良い感じの環境なのだ。壁はあるので風は通らず、屋根もあるから雨も来ない。そして地面もさして汚れていない。実家よりも良い環境かもしれない。あとこれで電気とかあれば良かったけど、廃棄されたビルにそこまで求めるのも酷な話かもしれない。本当にサバイバル慣れしてて夜目が効いてて良かった…。

「うーん、やっぱり塩が無いのは少し辛いよなあ…今度作るか」

焼いた魚を丸齧りして食べ終わると、布団の代わりに新聞紙を引く。おっと、濡れた服は全部焚き火の上で乾かさないと。

頑張つて拾ってきた木で工夫して焚き火の上に服を掛けると、僕は新聞紙の上で就寝した。

……。

そして迎えた翌日。朝。

僕は情報収集のために海鳴市にある図書館に来ていた。

「えっと、パソコンって使って大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないわよ」

図書館の受付の人とそんな会話をしたあと、早速僕はパソコンを起動させる。いやあ：本当に昨日の夜に廃ビルまで歩いた時に通りがかりで見つけて良かった…。

まあまず検索するのはそうだな：やっぱり負け犬公園のことかなあ、結局あるのかどうか分からないわけだし。

そう思っつて某検索サイトで検索を掛けてもヒットは0件。逆に海鳴海浜公園と検索すると意外と有名なのか、何十件と出てきた。やっぱりこれ、僕のいた世界と全く違う、いわゆるパラレルワールドって奴なのかな…。

次にそのまま、海鳴海浜公園の位置を調べると更に予想を上回る結果が出てきた。

「僕の世界にあつた県が無くなって、そこに別の県名が代わりに存在してる…」

…どうやら、パラレルワールドで間違いはないのかもしれない。2年前に県名が変わった記憶は無いし、負け犬公園も無くなっている。つまり僕は全く知らぬ世界に飛ばされた、…よつて戸籍ももしかしたら無いかも…あれ、やばくないかこの状況？

「えっと、要するに僕はこの世界に居ない人間という事になってるのか…」

…うん、これは極めて不味い状況だ。

パソコンの電源を切つて僕は席を立つ。

さつき鏡で見ただけどこんな幼い五・六才くらいの容姿で自分から働き口を見つげるなんて多分無理だし、そもそも問題戸籍が無い。一応海鳴市の地理は頭に叩き込んだけど、これと言つて行く必要のある場所も無いし強いて言うなら高町ちゃんと約束してしまったあの公園くらいだろうか。

「…こうなつたら、サバイバル続行あるのみかあ…」

まあ、親がいない分気楽には出来るか。そう考え直して僕は図書館を後にした。

――。

色々と必要になりそうな資材を集めていたら既に昼過ぎになっていた。僕は昼食に、今度は海で釣った魚(再びボロい釣り竿を自作)を焼いて食べると海鳴海浜公園へと向かう。

「あ、ハヤテ君！こんにちわなの！」

「あはは…こんにちわ、高町ちゃん」

いつの間にそんなに懐かれたんだろう…。高町ちゃんは満面の笑みを浮かべながらこちらへと駆け寄ってくる。

「えっと、じゃあ今日は砂場で遊ぼうか」

「うん！」

公園の端にある砂場は、昨日はかなり多くの子どもたちが居たのに今日は何故か誰も居なかった。なんだろう、今日は何かあるのだろうか…？

「じゃあなのはは鯉のぼり作るの…！」

そう言つて土を固めたり崩したりし始める高町ちゃん。にしても鯉のぼりが…时期的には5月だけど…もしかして…!?

「ねえ高町ちゃん、今日って何日だったけ？」

「今日は5月5日なの」

…やはり今日はどこもの日だったのか！だから今日の公園はこんなにも子どもたちが少ないんだ…。

そして高町ちゃんの家族はこんな日でも休まず働いてるんだ…父親が居ない分を埋めるために。そこに僕みたいな浮浪者の意見なんて挟む余地は無いの分かってる、けどももう少し家族の時間を大事に

しても良いんじゃないだろうか…？

「…どうしたの、ハヤテ君？」

いかにいかに、表情に出してしまったか。

「ううん、何でも無い。そうだな…じゃあ僕も鯉のぼり作るの手伝うよ」

「本当なの!?!じゃあ一緒に作るの!」

「じゃあまずは家から作ろうか」

「分かったの!」

「そうだ、そういや昔ショーハウスのバイトで見た家を参考にしよう!」

そうして出来上がった鯉のぼりは、従来の砂遊びを遥かに超えたものになったと後に高町なのはは語ったことを、その時の綾崎ハヤテはまだ知らない。

――

昨日同様、今日も高町ちゃんと遊び終わると薪を拾い集め釣り竿で魚を1匹釣り、それをビニールに入れて廃ビルに帰宅、するとビルの前に先客が来ていた。

「えつとすみません。このビルのオーナーさんですか？」

取り敢えず僕は黒い車を横に止めて黒服黒サングラス金髪ピアスと、如何にも言った様相の男性に話しかける。

「ああ？何だ貧相な顔をした坊主？ここはてめえみたいな奴が来る場

所じゃねえぞ?」

「貧相な顔って…そつちなんか完全に裏側に片足突っ込んでるタイプの顔付きしてるじゃないですか」

…ってやべー! 思ったまんまの事言っちゃったよ…。これ、怒鳴られて戦闘に入るパターンじゃ…?」

一昨日のこちらへ来る前の体ならいざ知らず、でも今の小学生くらいの体じゃとてもじゃないけど戦う体力なんて無い…!

「…ハツハハ! 坊主、言うじゃねえか! 結構俺はお前のこと気に入ってたぜ」

そう思い様子を伺うと、僕の予想と異なりそこには唐突に笑いながら僕の頭を軽く叩く強面の姿があった。…ふう、良かった。

「まあそれはともかく、さっきの質問だったな。俺はしがいない唯の用心棒だから違うぜ、ただ今はここに入らない方が良い」

「それはどうしてです? 一応そのビルは僕の活動拠点なんで入れないと困るんですけど…」

強面の男性は少し悩みながらも、髪をかきながらまあいいかと呟いて話し始めた。

「まあ坊主ならいいか、これはここだけの話だ。この中で誘拐が行われている」

「誘拐ですか…!?!」

それは奇しくも、僕がこちらへと来る前にお金を得るために考えて却下した犯罪だった。

「そうだ。まあ世の中に五万とある営利誘拐だ。囚われてるのはこの海鳴市どころか、日本でも有数の企業の娘が一人、その友達でそちらも県内では有数の企業の娘が一人。身代金の額は俺は知らされていないが、多分1億2億のレベルではないだろうな」

「そうですか…」

まさか丁度良いからと言って入った廃墟が翌日に犯罪現場になっちゃうなんて…未だ世界が変わっても僕の不幸は生きてるんだなあ…としみじみ思ってしまう。

「そういうことなら仕方ないです」

「そうだな、まあ今は大人しく公園にでも行つて数時間待つて…!？」

強面の男性が喋つてる間に僕は懐へ入り込み、即座に腹に拳を突き刺す。

「ぼう…何で…」

「流石に僕の仮拠点で、堂々と犯罪を行つてる人を見過ごす訳には行きませんかから」

「まじ…か…」

そう言い、強面の男性は気絶した。

僕は倒れた強面の男性をバックに、廃ビルへと入る。にしても良かった…確かに体力も筋力もこの頃の僕くらいのもものになってたのは昨日の時点で分かつてはいたけど、技術力はどうやら無くなってないらしい。まあ思えば手際良く木の棒と木の板を使って火種から焚き火を作れてたんだから当たり前かもしれないけど。そのお陰で勢いを殺さずに上手く拳を入れることができた。

そうして僕は廃墟内に足を踏み入れると、声が上の方から響いてくる。この感じだと四階部分からだろうか、僕の生活スペースじゃなくて本当に良かった。

「何するんのよ!この縄を離しなさい!」

「アリサちゃん落ち着いて…」

「ボス、こいつらどうします?」

「放つとけ。どうせ逃げられない」

4階まで上がると、とある部屋から高町ちゃんと同い年くらいの女の子の声と共に、複数の男の声が聞こえてきた。観察してみたところ、相手の人数は恐らく4人ほどだ。あとは銃を持つてるかどうかで変わってくるけど、その都度対処すれば良いだろう。取り敢えずここはそうだなあ…。

僕は先程道端で見つけた仮面○イダー的仮面を身につけ、部屋に入る。

「…!なんだお前!」

黒服のこれまた強面の男たちが僕の姿に気づき、こちらへ警戒の眼差しを向ける。

「僕の、僕の名前は綾崎は…」

「綾崎は、？」

いけないいけない、こういう所で本当の名前を名乗っちゃいけないような気がする。多分向こうは組織だし、名前がバレたらすぐに報復とか来るかもしれない。

綾崎は、は、ハ、…そうだ！

「綾崎、は、…ハーマイオニーだ!!」

「いや声質男でしょあんた!？」

そう縛られている金髪の女の子にツッコまれる。…案外余裕なんじゃないかあの子？

「まあそんなことはどうでもいい、取り敢えずあいつを殺せ！」

「了解だぜボス！」

「あのふざけた仮面をぶっ飛ばしてやる！」

そう言つて僕に拳銃を向けてくる強面三人組。どうやら命令している、あの奥で腕を組んでるハゲで強面の男性がリーダーらしい。

「とにかくその人、逃げてください！」

「その必要は無いです！」

今、確かに僕には体力と筋力は無い。だけど今まで人に言えないようなバイトや仕事を重ねてきた僕の技術があれば、そこをカバーするくらいは容易なこと…！

「グホツ…！」

銃弾を避けつつまず高速で近寄つて一人の顔面に回し蹴りを叩き込み、その後男が手を離したことで空中に浮いた拳銃を右手でキャッチ。そして流れるように前方回転受身から膝立ちの状態で立ち上がり、残り二人が手に持っていた拳銃を狙い撃つて落とさせる。

「おい何やってやがる!？」

「無理だボス！…こいつ動きが化け物染みてやがる！」

「ええい！俺が撃つ！」

奥にいたボスと呼ばれる男は、ホルダーから拳銃を抜いて僕の方に

発砲してくる。しかし、脇の締りが弱かったり拳銃の持ち方が違ったりしているせいか、全く見当違いの方向へ弾丸が刺さる。

「…でもこれはこれで危ないですね」

人質になつてゐる女の子達に流れ弾が行つてしまう前に僕は更にもう一発、リーダーの拳銃を撃ち抜き使用不可能にする。

「お、お、お前…目的は何だ…!？」

取り敢えず僕はまだ意識のあつた手下二人の首筋に手刀を入れ、リーダーの方へ近づく。

「そうですね…取り敢えず警察にでも捕まつてください」

そう言い、僕はリーダーにも手刀を入れた。

「あ、あんた何者なの…?」

金髪の女の子が震えながらも力強く聞いてくる。…まさか今までは虚勢だったのかな、そうだとしたら大したものだと思う。僕にはさっぱり分からなかった。

「そうですね…まあ敢えて言えば唯の浮浪者です。…あ、そうだ。さつさと縄を切っちゃいましょう」

そう言つて僕は縛られている縄を手で一本一本引きちぎうて切つていく。

「こんな太い縄を…私でも無理なのに」

ポツリと紫色の髪の毛が特徴的な女の子がそう零す。

「そりゃ女の子には難しいですよ…」

「いや…そうではないんですけど…」

なんだろう?…まあいつか。

「とにかくこれからは気を付けて帰ってくださいね?警察への連絡は僕から電話ボックスでやっておくので、へブツ!」

…転んだ。何も無い所で、思い切り。

「痛たたつ…ってあれ、仮面…」

「…男の子?」

「しかも私たちと同じ年くらい…」

…どうやらこんな所でもパッシブスキルの不幸が発動したようで、

転んだ拍子に仮面が取れて僕の素顔がバレてしまったみたいだ。

…これは、まずい。

「……じゃあ今度は気をつけるんだよ！」

「ええ……って待ちなさい！」

「待ってくださーい！お金の縁がまるで無さそうな人ー！」

何であの女の子、僕の悲しき特徴を知ってるんだろ…。

そう思いながら夜の町中を走る綾崎ハヤテ15歳（外見5、6歳）であつた。